高等教育院通信 2022.2 vol.12

高大人事交流の現場に立って

名古屋市立大学特任教授
吉田一彦

はじめに

2021 年 4 月、私は久しぶりに高校の教壇に立つことになった。高大人事交流事業の、大学から高校への派遣教員として、名東高校を中心に名古屋市立の高校そして中学で活動することになったのである。まだ若かった頃、私は東京で数年間高校の教員をしていた時代がある。だから、高校で教えるのは初めてのことではない。それでも 32 年ぶりのことになるから、不安もあり、事前の準備に力を入れた。そんな緊張の思いで着任したが、いざ教壇に立ってみると、短期間で不安は消えていった。着任校の先生方から温かく的確なサポートをいただき、また生徒たちの知的好奇心と進学への思いが日々の活動の励みとなった。人事交流は多くの発見と出会いがあって、面白い。まもなく一年目の活動を無事終えることができるが、それは刺激に富むものであり、私に充実感をもたらす体験となった。

高大接続、人事交流

高大の連携、さらに接続は、日本の教育にとって重要な課題である。最大の論点は、高校と大学の学びの接続の問題だと思う。高校と大学では、学習内容に直接連続しない部分があるし、日頃の授業内容を教科書にそくして理解あるいは暗記し､それを試験の答案に記述するという高校の学習方法と、プレゼンテーションやレポート作成、ゼミでの発表や討論、卒論作成が大きな部分を占める大学の学習・研究の方法とでは、大きな違いがある。大学新入生の中には、その小さくない差異にとまどう学生が少なからず存在する。他方、高校生にすれば、大学で何をどのように学ぶのか、その具体的なイメージがうまくつかめないままに、理系か文系か、そして学部、学科、大学などの進路選択を迫られることが少なくない。それは人生の重大な決断の一つになるものだが、よくわからないままに決めざるを得ないという生徒もいるように思う。かつて、大学進学率が今ほど高くなかった時代は、両者の非連続の問題は進学後に考えればよいだろうとされてきたし､「習うより慣れろ」の発想でやりすごされてきたように思う。しかし、大学進学率が高まった現在、この問題は解決しなければならない課題になっていると考える。

名古屋市立大学が高大連携､接続の問題をめぐって高校の先生方と議論を始めたのは 10 年以上も前のことになる。当時、教育担当副学長の先生と、教養教育担当学長補佐だった私は、名古屋市立高校の先生方と意見交換し、何から手をつけ、どのように実施するかについて話し合った。高校側で中心に立ったのは名古屋市立高校校長会の会長の先生だった。今から振り返ってみると、その時の議論はまだ萌芽的なものだった。その後、双方とも担当者が変わり、新しい先生方によって議論が粘り強く続けられ、名古屋市高大接続型の推薦入試（学校推薦型選抜）の制度が発足したのは大きな前進だった。また、入試だけでなく、大学の学びの具体像を高校生たちに紹介するプログラムも複数進行するようになった。そうした成果に立って、高大人事交流事業がはじめられた。

初年度にあたる 2021 年度は、名古屋市立高校の教員 2 名が名古屋市立大学へ、名古屋市立大学からも 2 名の教員が名古屋市立高校に派遣された。大学から高校への派遣は文系教員 1 名、理系教員 1 名で、名東高校と向陽高校が勤務地になった。私は、週に 3 日間高校で勤務し、2 日間は大学で教育と研究に従事した。

本年度の活動

ここで本年度の活動内容を覚書として記し、その成果と課題について考えたい。私の専門分野は日本史学であるが、この事業では高校の日本史の通常授業に私の担当を組み込む方式は採らず、「特別授業」の形で高 3 から高 1 までの生徒を対象に様々なテーマの授業をした。その内容は、大きく分けて、①大学の学びに関するもの、②文系の知に関するもの、③日本史の諸問題に関するもの、④名古屋の歴史と文化に関するもの、⑤修学旅行（広島）の事前指導、⑥入学試験に関連するもの、⑦高校生と大学生が直接触れ合う企画となる。具体的なテーマを掲げておくと、「高校の学習と大学の研究」「大学の研究／私の研究」「文系の知の重要性と魅力」「聖徳太子と聖徳太子信仰」「疫病と日本史――木簡と絵画から」「木簡からわかる古代研究の最前線」「国風文化論の行方」「武士とは何か」「日本の神仏習合と世界」「スライドで見るアジアの仏教と神」「名古屋学入門」「名古屋の歴史と文化」「18 世紀の名古屋の繁華街―享元絵巻を読む」「熱田神宮と大須観音」「広島の歴史と文化」「歴史学者は資料にこだわる――入試出題者の気持ち」「大学入試の小論文試験」などとなる。ただ、⑦に関しては、「名市大・名東高校コラボ企画――大学の学びと学生生活を知る」を計画してきたが、本稿執筆時点において、新型コロナウィルス感染症の流行が拡大しているため当初の日程を延期することとし、実施可能かどうか検討中である。

（名東高校・名市大　歴史学連続講座チラシ）

本年度、名東高校を中心にこれらの特別授業を実施したが、他に向陽高校で数回実施し、また中央高校、富田高校、桜台高校、菊里高校で実施した。中学校では黄金中学で「名古屋の歴史と文化財」を、原中学で「歴史研究の面白さ――木簡からわかる研究の最前線」を実施した。中でも印象深いのは、富田高校で実施した「名古屋の歴史と文化」の中で、中世の代表的な荘園絵図の一つである「富田荘絵図」について話をしたことである。現在の富田高校の位置は絵図のどのあたりにあたるか、当時の地名は現在どうか、海の位置はどうかなど、私の説明に生徒たちは熱心に応じてくれた。

高校生にとって進路の問題は大変重大で、進学率の高い高校では、高３になると入試が皆の大きな関心事となる。名古屋市立大学にはどのような学部・学科があり、どのような学習・研究ができるのか。これについて高校生たちに詳しく説明したいと考えた。そこで、名東高校で２回（高３対象１回、高２高１対象１回）、向陽高校で１回、名市大入試説明会を実施した。大学学生課の協力を得て大学・学部のパンフレットを希望者に配布し、名東高校の２回目の説明会では、私の全体説明のほか、総合生命理学部、薬学部の教員にも御参加いただいて、各学部で何が勉強できるのか、推薦入試の仕組みはどうかなどについて説明した。また、それとは別に、入学試験でしばしば実施される小論文試験はどのようなもので、いかなるコンセプトで設置されているかについても話をした。生徒たちは熱心に聞いてくれた。

（名東高校「大学入試の小論文試験」風景　2022 年 1 月 19 日）

名東高校で私のデスクは、進路相談室に設置された。ここにやって来る生徒たちの進路相談に応じるのが日常的活動の一つである。一学期の最初の頃は名古屋市立大学への進学についての相談が多く、中でも推薦入試の仕組みについての質問が少なくなかった。やがて時間の経過とともに、それ以外の大学についての相談も増え、他大学の推薦入試や AO 入試（学校推薦型選抜）についての相談にも対応するようになった。入試の結果が出ると、名市大にせよ、他大学にせよ、生徒が報告に来る。合格の報に接すると、本当によかったなと思う。

それから今年度の活動の一つとして、名古屋市立大学の講義の様子を伝えることを目的に、各学部のオンライン授業のいくつかを集め、あるいは編集をお願いして、模擬授業としてアップした。これについては、もう一人の派遣教員である櫻井宣彦准教授（理学研究科）と協力して実施し、櫻井先生の御尽力により見やすい特設サイトが出来上がった。これを次年度以降も活用できればと考えている。

おわりに

高大人事交流事業は、他にあまり例のない先進的・独創的な試みであり、その初年度にあたる今年度は、手探りで進むところが少なくなかった。小稿の最後に、今後の課題について触れてむすびとしたい。大きな課題は、定番プログラムの策定だと考える。高校から大学に派遣された教員は、また大学から高校に派遣された教員は、それぞれ何をどう担当するのか。各教員の裁量の余地、工夫の部分を残しつつ、定番の部分についてはプログラム化していく必要があると思う。その際、重視されるべきは高校と大学の学びの接続という観点であろう。策定にあたっては、派遣教員、高校・大学のそれぞれの関係者、教育委員会の担当者などによる十分な意見交換が必要で、その討議の中から定番プログラムが析出されるべきだと考える。私は、これが次年度以降の大きな課題だと考えている。